

黄金水大書

拾拾拾
式七
編編編

へ13
3023
4

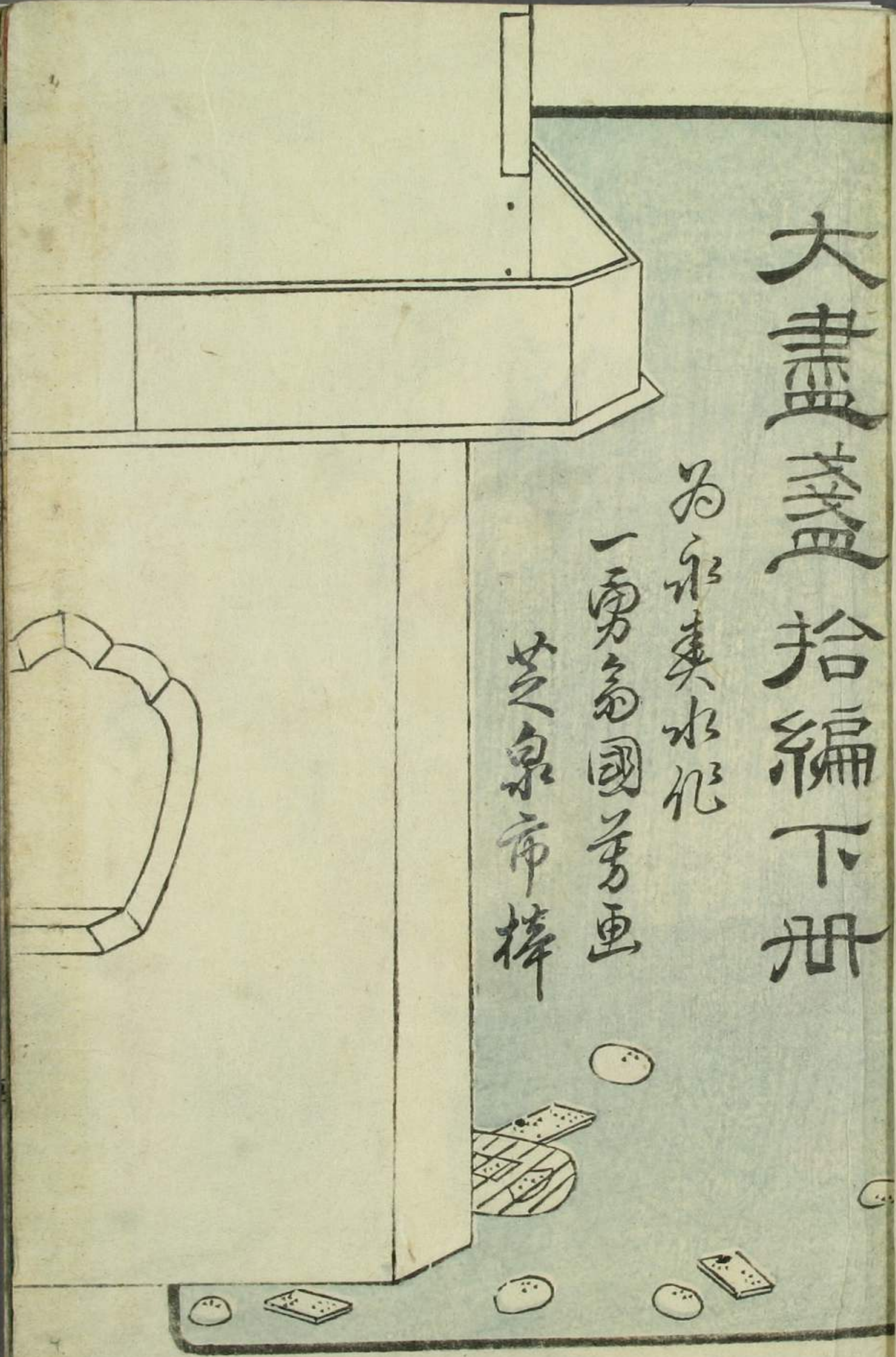


大畫蓋拾編下冊

為永奏水化

一兩方為國芳畫

芝泉市梓





勇齋國芳画

為永春水作

黄金水大盃杯十

甘泉堂梓

下

上



玉方画

黄金水大屋

水化

下

上

爲永春水作

黄金水大盃盃
編三

一惠心齋芳幾画



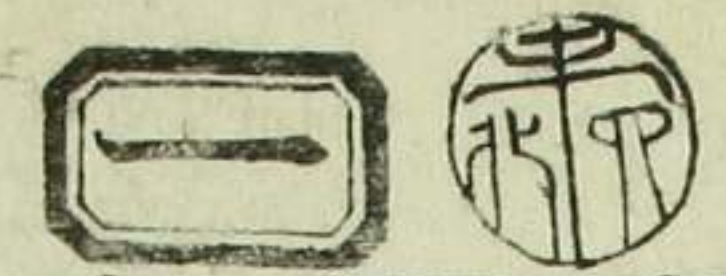
甘泉堂

上



十二編下

Handwritten calligraphy in cursive style, likely a poem or commentary related to the illustration. The text is arranged in several lines, with some characters being larger and more prominent than others.

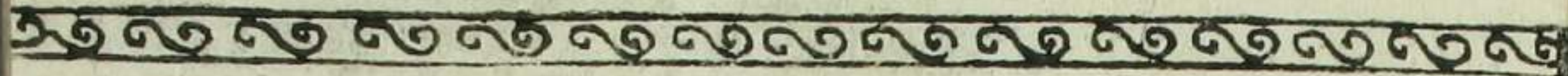


庚申陽春新販

為永春水誌

倒り地あり黄金と握り起さるる所あり珠を掴んで
立つと實は轉んでも只の起ぬ世界の風俗世の人情夫を
種ある合巻と紀文が傳記と號るも此の狂言奇語
て綴る冊子の是と基くまともあり硯の海乃根は
水小只管思ひと浮めつ筆頭の運ぶと急ぶのまれば
途向に爪突く所あり握る小余る玉の汗拭ひと入す
一輯とて茲に再び幕をひらけ

黄金六十一編



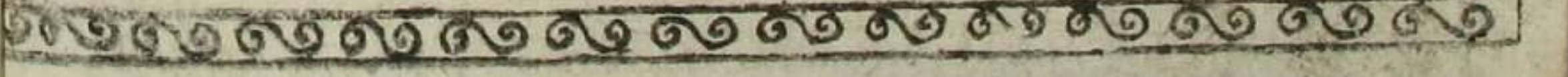
黄金水一冊

丁百屋の
穿妻小舟



丁百屋の
穿妻阿吉

拔作が妻
道野



丁百屋



丁百屋の
發妻阿伊達

手代
乃世吉



丁百屋
拔作

十八の月... 伊勢の... 乃世吉... 伊勢の... 乃世吉... 伊勢の... 乃世吉...



乃世吉... 伊勢の... 乃世吉... 伊勢の... 乃世吉... 伊勢の...



乃世吉... 伊勢の... 乃世吉... 伊勢の... 乃世吉... 伊勢の...

黄金十段

りつものうで
まひまわつて
りふとちのう
あつつけねり
りらあの子が
うげとるると
そのはくもち
いひまひの
こと

ゆらゆら
まひまわ
りふとちの
あつつけね
りらあの子
うげとるる
そのはくも
いひまひの
こと



あつつけねり
りらあの子
うげとるる
そのはくも
いひまひの
こと



あつつけねり
りらあの子
うげとるる
そのはくも
いひまひの
こと

青
五

五



百味楼

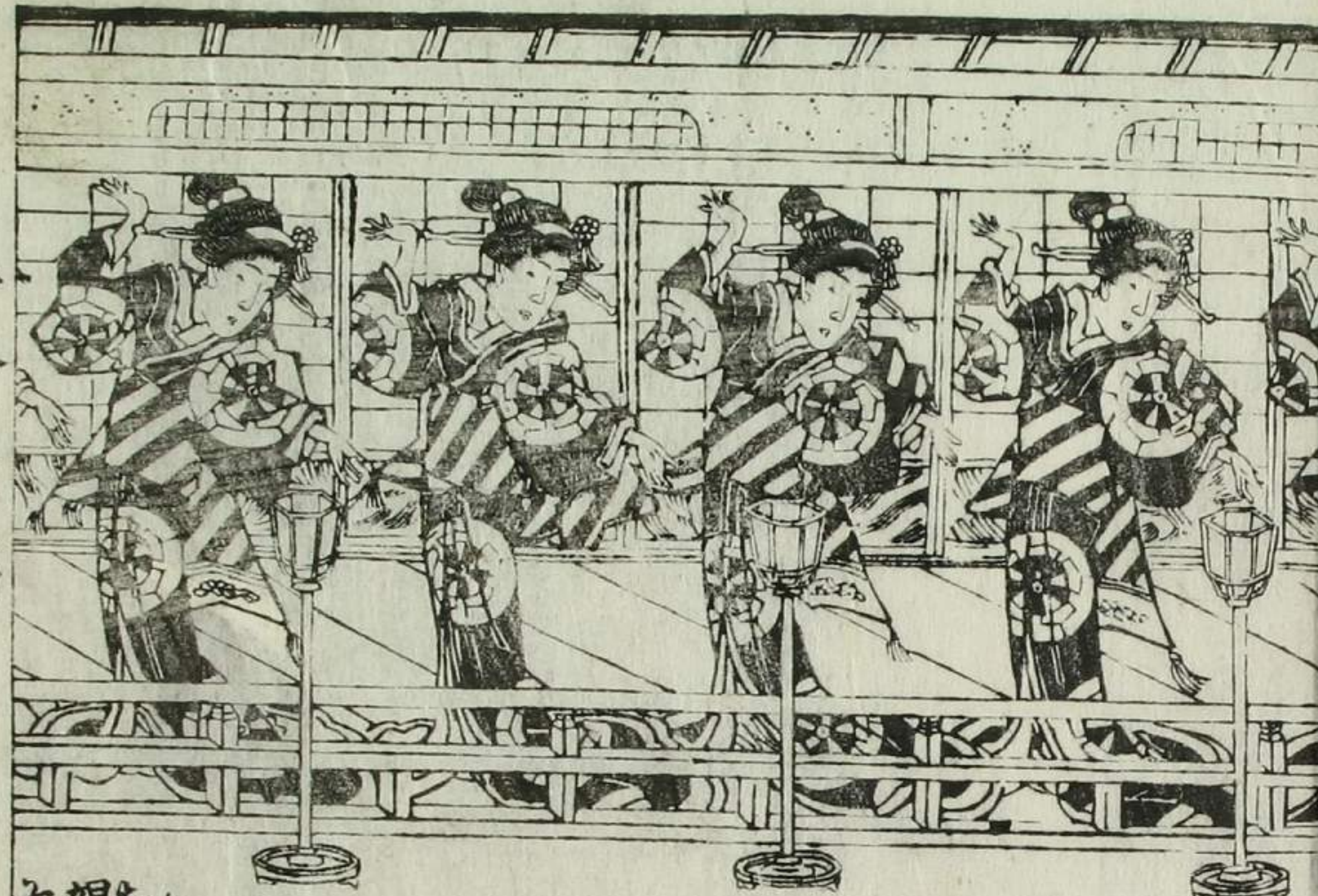
百味楼

ことごとく...
 ことごとく...
 ことごとく...
 ことごとく...

右ノ...

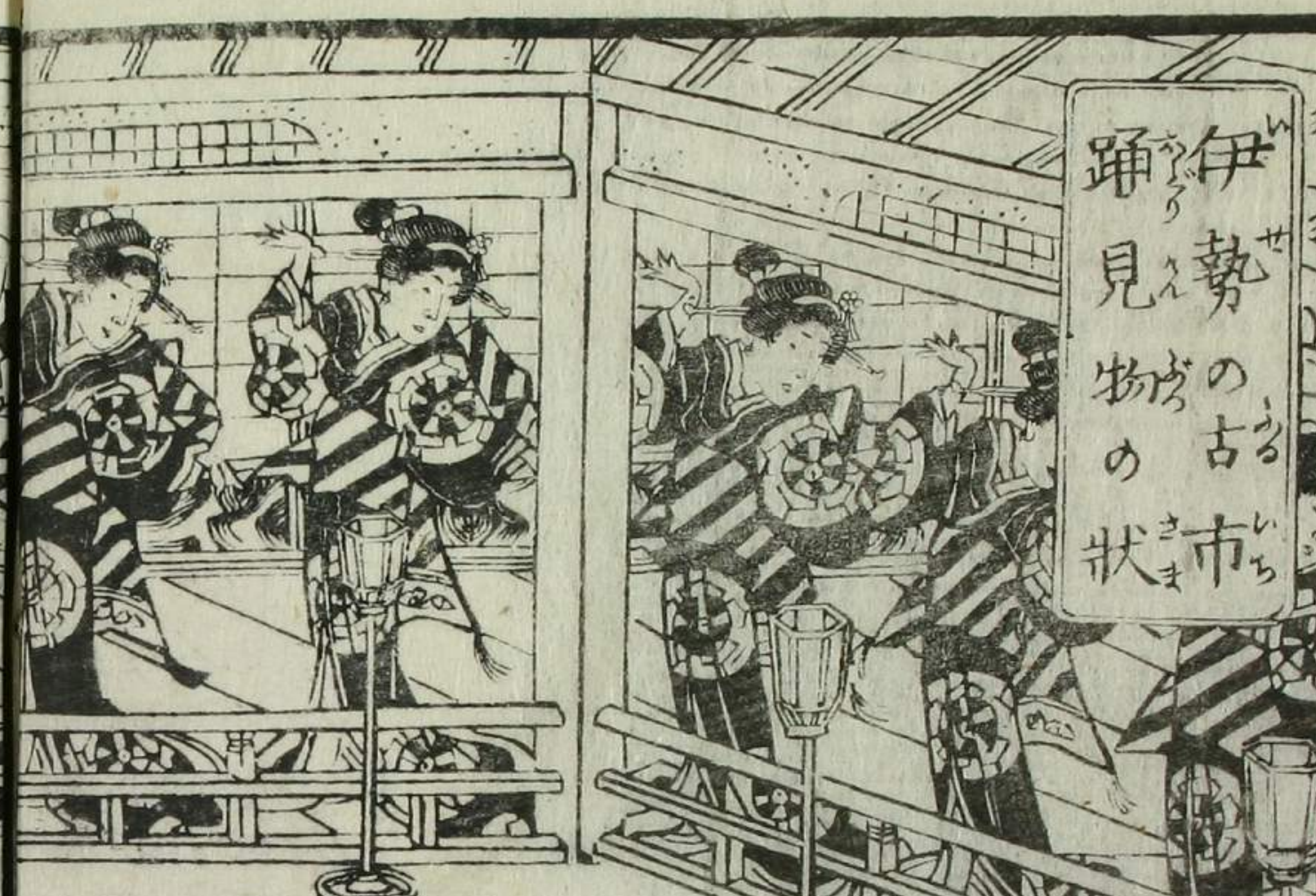
左ノ...
 左ノ...

うも...
 うも...



貞女ノ一冊

と各々の名を
いふは
その夜の世帯が
あなづき
あなづき
あなづき
あなづき



と各々の名を
いふは
その夜の世帯が
あなづき
あなづき
あなづき
あなづき



伊勢の古市
踊見物の状

貞女ノ一冊

山田のまぢ
 まぢりつて
 うるとあの
 りのまを
 りひちり
 あつて
 さつんを
 やどを
 のころま
 せありて
 のうちあ
 りのまを
 まつら
 つたまを
 それでい
 がとのせ
 られてか
 せとを
 あつて
 の夜ひ
 ふであ
 とつり
 をあ
 のせ
 ちうら
 どのふ
 ふあ
 りあ



山田のまぢ
 まぢりつて
 うるとあの
 りのまを
 りひちり
 あつて
 さつんを
 やどを
 のころま
 せありて
 のうちあ
 りのまを
 まつら
 つたまを
 それでい
 がとのせ
 られてか
 せとを
 あつて
 の夜ひ
 ふであ
 とつり
 をあ
 のせ
 ちうら
 どのふ
 ふあ
 りあ

山田のまぢ
 まぢりつて
 うるとあの
 りのまを
 りひちり
 あつて
 さつんを
 やどを
 のころま
 せありて
 のうちあ
 りのまを
 まつら
 つたまを
 それでい
 がとのせ
 られてか
 せとを
 あつて
 の夜ひ
 ふであ
 とつり
 をあ
 のせ
 ちうら
 どのふ
 ふあ
 りあ



山田のまぢ
 まぢりつて
 うるとあの
 りのまを
 りひちり
 あつて
 さつんを
 やどを
 のころま
 せありて
 のうちあ
 りのまを
 まつら
 つたまを
 それでい
 がとのせ
 られてか
 せとを
 あつて
 の夜ひ
 ふであ
 とつり
 をあ
 のせ
 ちうら
 どのふ
 ふあ
 りあ

黄、金、水、十、三、編

十四

又のせむき
 とせむき
 ちゅうやせ
 さるりり
 ふらふらふ
 むらぶらぶ
 むらぶらぶ
 けりけり
 せりせり
 のりけり
 ちゅうやせ
 さるりり
 ふらふらふ
 むらぶらぶ
 むらぶらぶ
 けりけり
 せりせり
 のりけり

又のせむき
 とせむき
 ちゅうやせ
 さるりり
 ふらふらふ
 むらぶらぶ
 むらぶらぶ
 けりけり
 せりせり
 のりけり

又のせむき
 とせむき
 ちゅうやせ
 さるりり
 ふらふらふ
 むらぶらぶ
 むらぶらぶ
 けりけり
 せりせり
 のりけり

又のせむき
 とせむき
 ちゅうやせ
 さるりり
 ふらふらふ
 むらぶらぶ
 むらぶらぶ
 けりけり
 せりせり
 のりけり

五文次郎とよむ



十五

又のせむき
 とせむき
 ちゅうやせ
 さるりり
 ふらふらふ
 むらぶらぶ
 むらぶらぶ
 けりけり
 せりせり
 のりけり

又のせむき
 とせむき
 ちゅうやせ
 さるりり
 ふらふらふ
 むらぶらぶ
 むらぶらぶ
 けりけり
 せりせり
 のりけり

又のせむき
 とせむき
 ちゅうやせ
 さるりり
 ふらふらふ
 むらぶらぶ
 むらぶらぶ
 けりけり
 せりせり
 のりけり

又のせむき
 とせむき
 ちゅうやせ
 さるりり
 ふらふらふ
 むらぶらぶ
 むらぶらぶ
 けりけり
 せりせり
 のりけり



五文次郎とよむ



朝 鮮 牛肉丸 百銅
 鮮 牛肉丸 百銅
 鮮 牛肉丸 百銅
 鮮 牛肉丸 百銅



備書
 交來

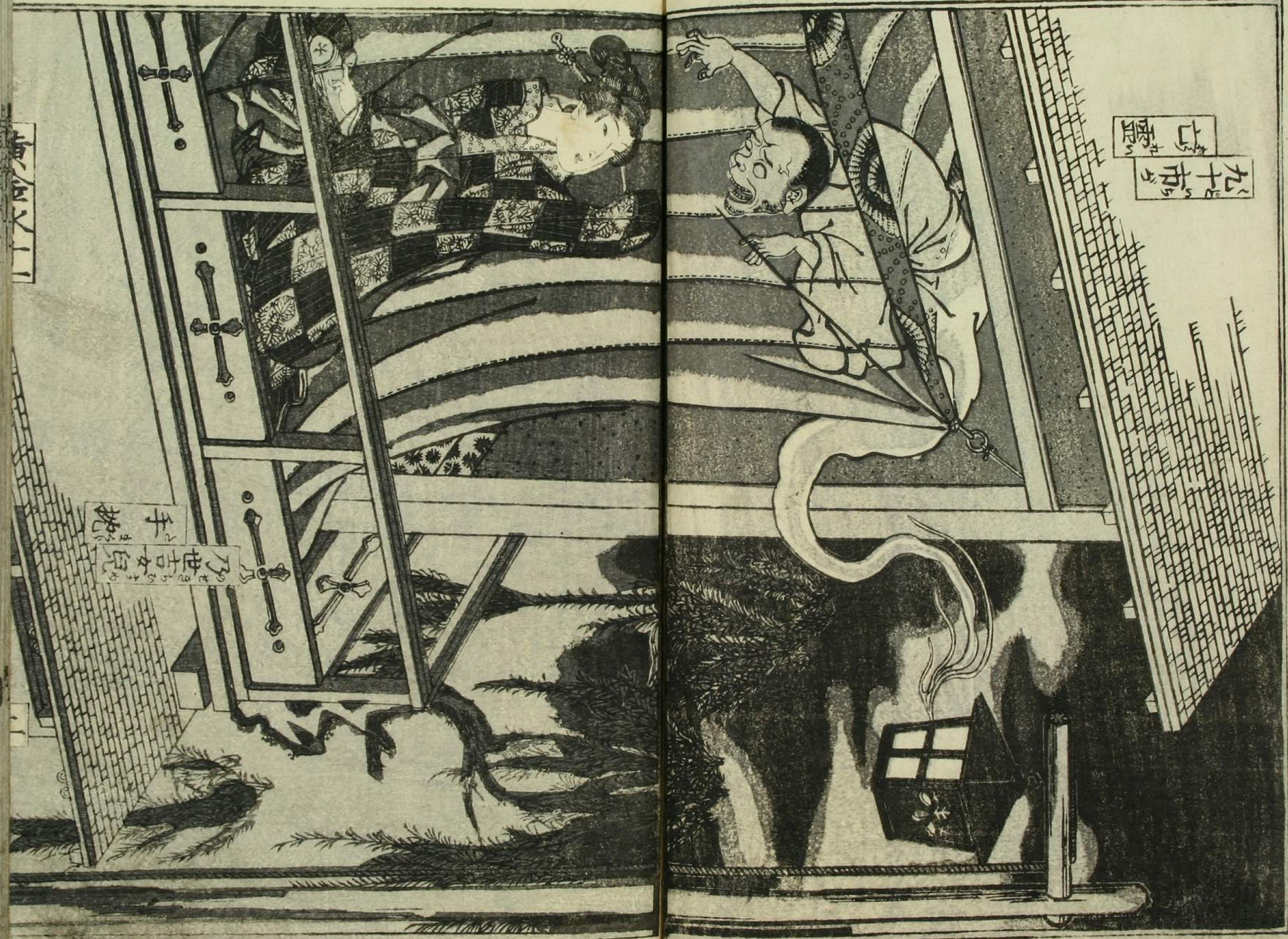
對 深 壽 氏 製

爲永春水作歌川國芳画

第十編より本編に至るまで
 那金妙寺火更の可起因果
 伝るやまの復是勸善懲惡の一助とありき事跡を
 泄さん更も遺憾されを因に仍て綴りし思ひありて紙員
 足らねこの這篇も説果さば遮莫十二編に至るべ此一段で結局
 なるめ文左が頓智奇才ある耳のうし話説は暨る巻を
 開く婦幼童雅紀文が傳記に紀文の出ね汁粉餅の小説
 事思ひぬらんゆめと僅に作者の用意を示す

爲永春水誌る

庚申初春良辰



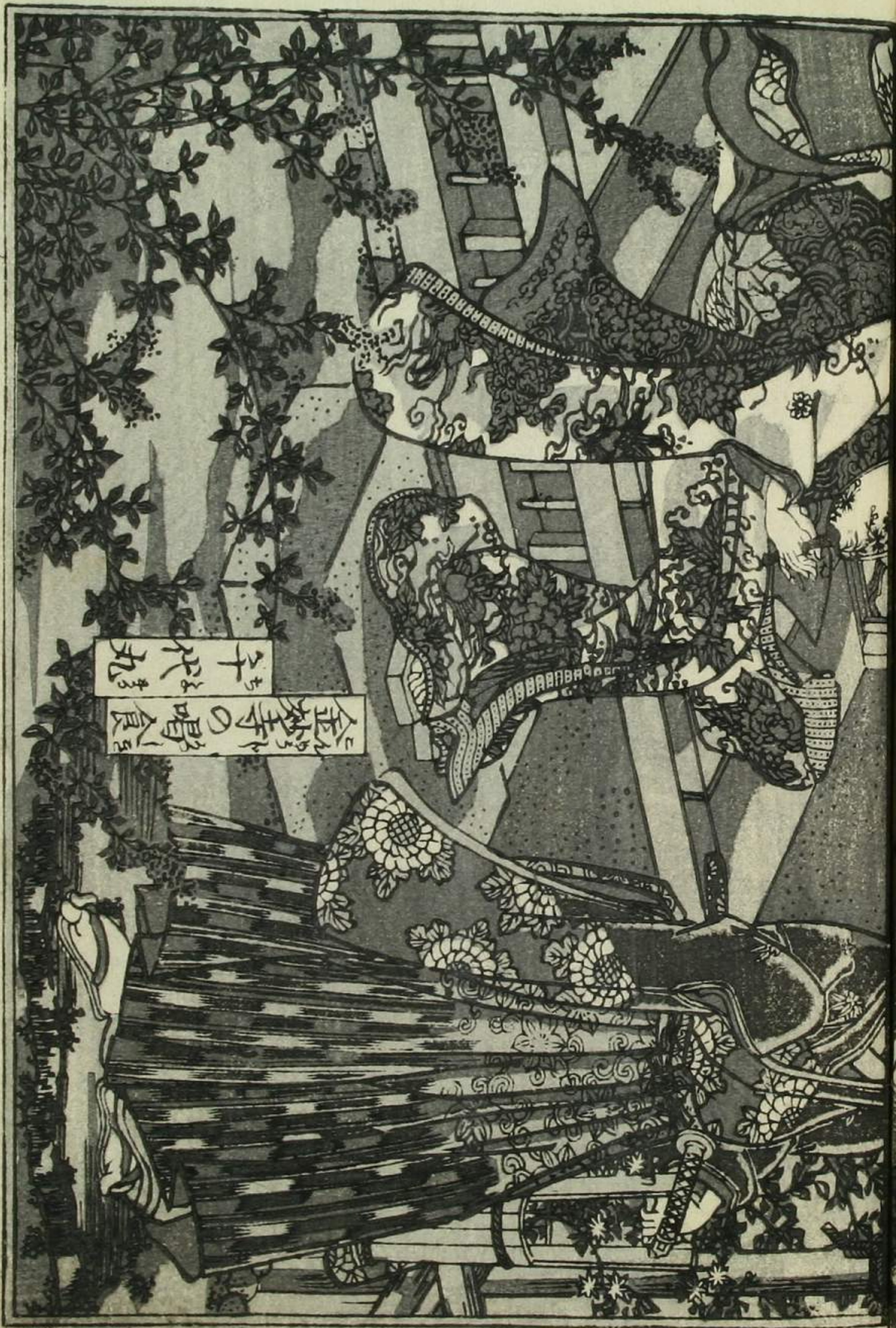
九十九
打

乃世古女
手

九十九

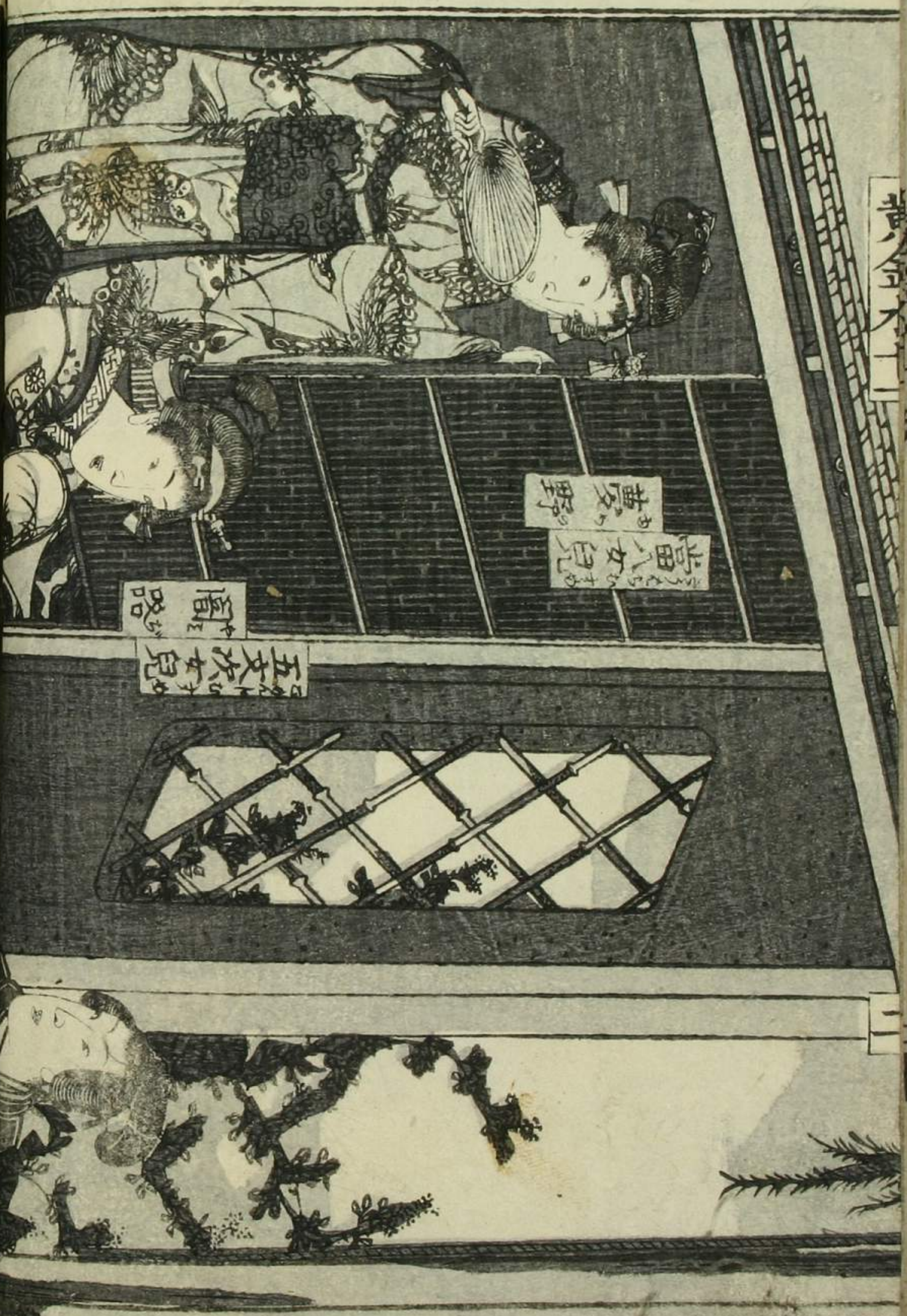
九十九

九十九



千代丸

金妙寺の喰食



闇

五次女兒

夢野

當八女兒

青金大

青金大

ついでに... (Vertical text describing the scene or characters)

この下巻の巻... (Vertical text on the right side of the lower page)

國芳画春水作



上の巻より... (Vertical text on the left side of the upper page)

この下巻の巻... (Vertical text on the left side of the lower page)



紀文... (Text block in the upper left corner of the page)

甘んじと
 むのうせひ
 ここのちる
 あらう
 むのうせひ
 ここのちる
 あらう



あつた
 おまへ
 せめて
 せめて
 せめて
 せめて



あつた
 おまへ
 せめて
 せめて
 せめて
 せめて

金才十一

十一

さのうらゆ
 おれらの
 の実印は
 あらさう
 んかひ
 印形は
 つとま
 うかひ
 のわりま
 ぬけさ
 さのうらゆ
 だんま
 あらさ
 さいの
 まりの

黄金水



ちりあ
 ちりあ
 ちりあ
 ちりあ
 ちりあ
 ちりあ
 ちりあ
 ちりあ
 ちりあ
 ちりあ

十五

つひに
 日さ
 とを
 ちりあ
 ちりあ
 ちりあ
 ちりあ
 ちりあ
 ちりあ
 ちりあ
 ちりあ

黄金水



あら
 ちりあ
 ちりあ
 ちりあ
 ちりあ
 ちりあ
 ちりあ
 ちりあ
 ちりあ
 ちりあ

十七

文の美しきものありては
 あらまじりやうのつれ
 うらやまのつれありては
 むかしうのつれありては
 くれなゐのつれありては
 ...



為永春水作 一勇齋國芳画

◎あやせ
 うらやまのつれありては
 むかしうのつれありては
 くれなゐのつれありては
 ...



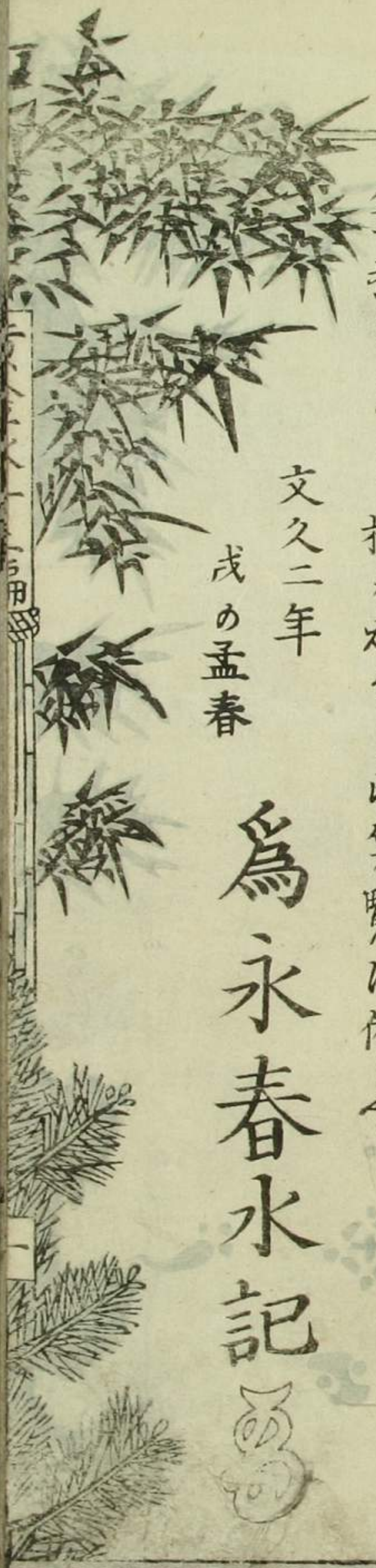
備書 交來

紀文の花街に歳夜の金を蒔けりと言へる更の物の本に
 粗見えの色に。這口画屏の何れにも。僅に只この一事ありては
 文左が一期乃榮花の知らまん。實に百萬の貨を遊戯し
 佐のひ果せしもの。古今に比類なき。今その傳記を編み
 及び紙買も薄き冊子。紙も巻の佳境ふりつらふに
 まよ。去給の僕も。緯若く。机に塵をわく日とつらう。編輯に
 草稿後まの。先や今茲の報ひを。暫んとす川の内をり
 筆採を免る。相心かちらむ。笑覧に備ふ

文久二年

戌の孟春

為永春水記





紀文大盡



昔金水十二編

廊の節分に
紀文黄金の
追難まるる
圖



黄金の節分





りんごのつぼみ
 むぎの穂がたふさふさ
 あまのこころは
 むぎの穂にまぎれ
 むぎの穂がたふさふさ
 あまのこころは
 むぎの穂にまぎれ

かひきかたのあまのこころ
 あまのこころは
 むぎの穂にまぎれ
 むぎの穂がたふさふさ
 あまのこころは
 むぎの穂にまぎれ



りんごのつぼみ
 むぎの穂がたふさふさ
 あまのこころは
 むぎの穂にまぎれ
 むぎの穂がたふさふさ
 あまのこころは
 むぎの穂にまぎれ

かひきかたのあまのこころ
 あまのこころは
 むぎの穂にまぎれ
 むぎの穂がたふさふさ
 あまのこころは
 むぎの穂にまぎれ



の世帯の
 まはらう
 とのちりあし
 とあやうし
 たりちが
 ちりちが

のか
 めの
 あま
 ちりちが
 のちりちが
 めのちりちが
 のちりちが

のちりちが
 のちりちが
 のちりちが
 のちりちが
 のちりちが

のちりちが
 のちりちが
 のちりちが
 のちりちが
 のちりちが

のちりちが
 のちりちが
 のちりちが
 のちりちが
 のちりちが

のちりちが
 のちりちが
 のちりちが
 のちりちが
 のちりちが

吉入 大 一 二 冊

日



一茶ある御膳



金持手...
かた...
あつ...
あつ...
あつ...

あつ...
あつ...
あつ...
あつ...
あつ...



あつ...
あつ...
あつ...
あつ...
あつ...



あつ...
あつ...
あつ...
あつ...
あつ...



あつ...
あつ...
あつ...
あつ...
あつ...

